特　集

英語リスニングテストの導入がもたらしたものと今後の課題

千葉県立千葉女子高等学校教諭　向　後　秀　明

1．英語教員への揺さぶり

平成18年度入試のセンター試験で英語リスニングテストが導入されるということが明らかになってからの騒ぎは，ちょっと尋常ではなかったように思う。特に当事者を抱える高校の英語教員の間では，問題の構成やレベルなどについて様々な憶測が飛び交った。

平成16年に試行テストが実施されてからはさらにヒートアップし，追い討ちをかけるように，出版社がこぞって「センターリスニング対策」なるものを作り出した。それまでGrammar-Translation一本やりで通してきた「受験英語の達人」と呼ばれる教員の授業で，突然リスニング演習が入ったなどという話も珍しくない。

滑稽ではあるが，実はこれがリスニングテスト導入の大きな功績の一つであるとも言える。「オーラル・コミュニケーションⅠ」で多少なりともリスニングを扱った後は，卒業時まで「音声不在」の英語教育をしていた教員でさえ，動かざるを得なかったのである。これにより，少なくとも廊下を歩けば，教室で行われているのは「英語」の授業であることがわかるようになった。かつて日本の中学や高校における英語の授業が，Communicative Language Teachingの一方向に振れすぎていると指摘された時期もあったが，それは決して全国規模での動きではなかったように思う。学習指導要領が変わっても，「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」が出されてもどこ吹く風―センター試験のリスニングテスト導入は，そんな状況に揺さぶりをかけたのである。

2．試行テスト実施後の“迷走”

多くの英語教員が音声指導に目を向けたという点で，今回のリスニングテスト導入には大きな意味があった。しかし，残念だったのは，試行テストを模した「対策本」などを使い，CDを流して問題を解答し，生徒の正解率が低ければ何度でも繰り返す，という指導で終わってしまったケースが少なからず見受けられたことである。これは問題形式を知るという点では有効だ

が，“聞けない”生徒のリスニング能力を引き上げるという点ではあまり機能しない。なぜ聞き取れないのかを分析し，それを克服する指導を行っていくべきであろう。日本人高校生がリスニングで障害となる要素としては，例えば次のようなことが考えられる。

・未知語が多すぎて，全体像を把握できない。（スクリプトを読んでも理解できない状態）
・既習の語彙や表現であっても，自分の中で内在化している音と異なる，あるいは音変化等によって認識できない。（スクリプトを読めば理解できる状態）
・音声を意味のまとまりとして処理する能力が，流れてくる音声のスピードに追いつかない。
・場面や話題に関するスキーマが乏しく，聞いている内容を頭の中でvisualizeできない。

教員は生徒がどこでつまずいているのかを探り，そのつまずきに対して適切な処置を施す必要がある。

3．生徒の反応―意外な盲点

平成18年1月21日，ついにリスニングテスト当日。「午後6時40分終了じゃ，体力勝負だ！」などと冗談交じりに話していた生徒たちに，受験後の感想を聞いてみた。テストそのものについては，ほとんど混乱がなかったようである。これは，多くの生徒が試行テストに触れていた上，大学入試センターのホームページに掲載されていた「ICプレーヤー操作ガイド」等の情報をきちんと吸収していた結果であり，本試験実施までの「告知」が適切なものであったと言えよう。

ところが，周辺的な事柄について，次のような反応があった。

〈ICプレーヤーについて〉
・“一番聞きやすい音量”を決めるのにとまどい，途中で何度か音量を変えて落ち着かなかった。
・イヤホンを通した音声に慣れておらず，違和感があった。
⇒受験者は試験後にICプレーヤーを持ち帰ることができる。これを学校で保管するなどし，次年度受験生の練習用として活用するといった手立てが有効であろう。

〈心理的な要素について〉
・リスニングテストの最中に，筆記試験で解答に迷った問題のことを考え出してしまった。
・集中力が持続せず，聞いている英語が頭に入ってこない問題があった。
⇒確かに，ふだん授業の中で，連続して30分間英語を聞くという場面はほとんどない。しかもそれが80分の筆記試験の後なので，慣れていないと相当の疲労感を覚えるだろう。30分間英語を聞き続けるというのはどのような状態なのか，事前に体験しておいたほうがよい。

4．テストデザインに対する評価

センター試験のリスニングテストは，テストデザインにおいていくつかの特徴がある。それを教師や受験者はどのように感じ取ったであろうか。

特徴1〈問題冊子に質問と選択肢〉

音声が流れる前に話題を予測することができるとともに，聞き取るべきポイントを絞ることが可能である。前の問題をマークしてから次の問題が放送されるまでの数秒間に，どれだけ情報を取得できるかどうかがポイントになる。実際，事前対策として，「問題＆選択肢速読トレーニング」なるものを受けた生徒も少なからずいると聞く。

ただ，問題冊子が“ヒントの宝庫”になりすぎではないか，と考える向きもあるようだ。問題冊子上の文字やイラストから瞬時に情報を得て，スクリプトの内容を推測したりするテクニック的な部分にフォーカスがいきすぎないよう注意する必要がある。

特徴2〈問題文の音声は2回〉

すべての問題について，英語の音声は2回流れる。したがって，〔問題冊子からの情報取得〕⇒〔1回目のリスニングで正解の仮決め〕⇒〔2回目のリスニングで確認〕というプロセスが可能となる。英検などの外部試験を受けて1回聞きに慣れている生徒は特に，余裕をもって受験できたようである。もちろん受験時はこの2回聞きをフル活用することになるが，日ごろ1回聞きで練習を積んでおけば，本番ではかなり楽になるであろう。

1回聞きの問題を含めるべきではないか，という議論もある。これは大学入試センターが，高等学校におけるリスニング能力の到達度目標をどのレベルに設定するかということと深く関わってくる。

特徴3〈150wpm前後の発話速度〉

試行テストと比べると，第1回のリスニングテストは聞き取りやすかったと感じた生徒が多かった。その要因の一つは，両者の発話速度の違いであろう。長谷川（2006）は，試行テストの平均が176.6wpm，第1回テストのそれを147.0wpmとしている。第1回テストでは特にポーズが多く挿入されており，生徒は意味のまとまりを把握しやすかったことが予想できる。

最近の教科書には，かなり発話速度が速いスクリプトを聞いて行うタスクも含まれている。何をもってauthenticityがあると判断するかは難しいところだが，発話速度の操作は，今後の大きな課題の一つであると思われる。

特徴4〈易から難へのレベル傾斜〉

一般的にスクリプトが長くなればなるほど，受験者は難しいと感じる。例

えば第４問Ｂは184語あったが，これくらいの分量になると，話の流れを追いながら情報を整理して聞き取る能力が要求される。今回のリスニングテストを小問単位でみると，多少の前後はあるものの，概ね徐々に語数が増えている。また，話題も比較的身近なものから，社会的なものへと移行している。この流れは他のリスニングテストでも同様の傾向にあり，受験者に戸惑いはなかったであろう。

５．リスニング指導の変化

(1) 全科目におけるリスニング指導

センター試験の直前になって，「さあ，耳を鍛えましょう」というのでは対応しきれない。高校入学後から３年間にわたり，どの科目でも，多かれ少なかれリスニングを取り入れていこうとする方向に教員が動き出している。

(2) 測定される能力への関心

これまでリスニング指導を漠然と行っていた教員も，センター試験のリスニングテストを分析することで，筆記試験と同様に各問で求められている力の違いを知ることになる。例えば，第１問では短い情報の中から，時刻や値段などの細部情報を聞き取る力，第２問では対話の流れから，最後の発話に対して適切な応答を判断する力というように，問題ごとに特徴がある。そこで教員は，これまで多く見られた「聞いて解答確認」の繰り返しから脱却し，求められている能力別に効果的な指導を考えていくことになるはずだ。それに基づいて，異なる種類のタスクを用意して授業に臨む必要が出てくる。

(3) 情報の取捨選択

リスニングテストの導入は，英文をいつでも訳読しないと気がすまない教員と生徒に，一つの意識転換を迫る。リスニングテストでは情報のすべてを完璧に吸収しようとするよりも，特に問題解答という点では，情報の優劣を瞬時に判断し，必要とするものを中心に頭の中に残していくほうが効果的である。教科書の英文を丸写しして，その下に和訳を書くことを行ってきた（強いられてきた？）生徒にとってはつらいかも知れないが，内容中心に情報を取捨選択することができる柔軟性が求められる。

(4)「直聴直解」を目指して

リスニングテストでは目に見えず，瞬時に消え去っていく音を相手にしなくてはならない。そのため，聞いた英語を“きれいな”日本語に置き換えていく余裕はない。しかし，教室から一歩外を出ればほとんど英語を必要としない，“超EFL環境”下にある日本人にとって，母国語をまったく介在させないで英語を理解するのは難しい。そこで，逆に日本語を効果的に利用して，以下のような練習を通して少しでも

「直聴直解」に近づけていく工夫もなされるべきだと思う。

①Schematization（英文内容に関するoral introductionやQ&A）

②1st listening for outlining（話題や状況の把握）

③2nd listening for in-depth information（内容理解）

④Chunk-translation（必要最小限の日本語を使って聞いた順に和訳）

（例）［平成18年度センター試験リスニングテスト第４問Bより］

In today's program（*今日の番組*）／I'll tell you amazing story（*話す，驚くべき話*）／about something that happened in Bermuda（*起こったこと，バミューダ*）／about fifty years ago.（*50年前*）

６．高・大のつながりを求めて

(1) 近隣大学との連携

リスニングを専門的に研究している高校の教員は多いとは言えず，その結果，教科書や問題集の構成どおりに進めていくだけという結果になりがちである。今後継続的に適切なリスニング指導をしていくためには，地元の大学にもっと“応援”を要請してもいいのではないだろうか。大学から講師を招聘してリスニング指導講座を開き，そこで得たものを授業にフィードバックする，というように。

(2) 高・大一貫のシラバス

SELHiの教育を受けた生徒が大学の英語の授業で「何だ，こりゃ」とショックを受けた，という話を耳にする。大学には大学の求めるべき教育があり，どちらが良い悪いという問題ではなかろう。しかし，少なくともセンター試験のリスニングテスト導入を機に，高校ではより音声重視の英語教育にシフトした。その路線が，高校卒業と同時に断ち切られてしまうのでは，生徒もたまったものではない。全国規模で見ると，英語教育における高・大の連携はかなり危うい。曲がりなりにも英語そのものをターゲットとする授業であるのなら，「生きた言語」という観点からの活動が入っていてほしいと願う。さらに，高・大の教師がもっと自由に行き来して，お互いに「いつでも授業を公開しますよ」とオープンな雰囲気で勉強し合う態勢が不可欠だ。高・大の英語教員同士のコミュニケーションが，リスニングに限らず，英語指導全般においてキーとなっていくだろう。

【参考文献】

長谷川宏司（2006）．ＳＴＥＰ英語情報 9・10 2006，㈶日本英語検定協会 pp.14-17

柳瀬和明（2006）．同上 pp.22-23

向後秀明（2006）．ＧＣＤ英語通信第39号，大修館書店，pp.18-19